941
1

特別
へ10
5635

ISSEIDO
東京 神田

萩日記

おのれ此廿年京都にすみつゝいまハ八とせあまりをさなかりしをハ
さるまじきわざにもあらぬをいひなしてやみにしを(?)さらにおもはずなりしかことし
みな京の親のもとにまかりにしかへりこんとおもひかけてゆきて
またかへるともいふことのきよくいひけるは六月の二十四日の日にてかねて
さる所に君をむかへいとまをこひ午時ハかりにかつらを(?)ゆきてひかのぬ
ゆきて見えさせたまひて山ざとのいたうにかへりまでし
ふたりいつくしき川の瀬をわたりて
うちすぐるの袖をうちはらひてハ小簾子の松ハ月見さんへ行そへてせんて

越前路にて

秋風のふくるのうみやとくきゝてあつさをしらぬ越路の旅
近江国をさくれバ雨ふりかゝるふ陸(?)
比良の上山をきしかたに流れてみえおりて雨さらにゆく

寶玲文庫

特
門 へ 10
號 5635
巻

36 2267

雨ふらでこゝろくるしけれ
　雨ふるとみせてなかなかふりもせぬ夕立の空
京都七条の偏照寺は五このすゑしむらつなるを
よしれたるもの人とゆふに大雨ふりむせて言くもの
なかりしに雷なりひゞきて四条小橋にゆきやうくもの
やけて三条なる吉川町むこのやとはむ出むら之つ
たつ之いさゝかよく見えてこの夏は夕顔の
さかりを
　めづらしくことしを待えて夕顔の花さかりなるたそかれ
東五日はやく智恩院の大鐘をつくこれ毎年みさ八宗祖
のみ日とて鐘をつくを
　きゝし鐘は東山さしてむかふ手もかきりて
終日くありとみたる東山をうちながめ八坂神社まうでて

雙林寺は萩いさゝか咲きめぐり
　咲出てむらあつまりぬ萩の露ちりて風ゆき秋めく
この日くすりうりあまた雨ふりけるがかつ庭七月十七日より
　月をみるにはよしと西の岩をおとしの雨をさく招かれ
東六日やゝ晴て八坂まうでさのふのことし智恩院の境内を
とおりて
　其蝉の声みなれしきりに鹿の子の下紐かよひして
ころもはちかひすゞしくつらねて円山の動物園を見る
あはれにぞあけくれて桜にていちはやき頃
東七日ひる雨くだりて八坂まうでさのふのことし其坂
日ことに思ひつ
　ゆうことも雨もやみて涼みつゝ枕もとに山端の月
に月の出るをまちいたるをさや所

〔?〕ゑみ庵ハ玄々の大さ三畳にや一ト間に土を地の志ハあとにして
茅ふきより罪際あゆきをそろゆきへゆくに小橋かゝりそこに
葛の生ひしげりたる松生ひ立ちすぐ
ありまゆかうてんを身をゆる露をたつねてややそ帝の御むし
部をしのび入い出し山の鳴るる梢を見てうそぶくときき
十八日晴ゝきよう筆をのそしてそれ子どもの今にてかしこ
学校巣立せ子たちか多くの京みやこをつとへ多くも尚母
来ぎりしと以ひやうんもハその中ニささへて来あふみなもの名あれ
と五六人つとひあひて話をるまて かゝりしか
ころとらいんむうみせまてちせしあれ家ひ清き加茂の川波
ころいとあつきにたへよとすめせんと出てありとてもおかく
とまかひて清水寺をゆかんと聖護院高台寺の前をそ尺こそ
こ〔?〕ちまゝつ産寧坂をおりてかの寺にまゐりて新ら尾と

三年坂の右手やすこし登りには楓おほえたりて地もあり
たちやくよしまの秋やさしめなる茶せんそあるえての露にさむれし
音羽の滝いつもあかゆめていと清らにしみもり
若しあるなとつたふもしなくのかたの滝にむかふ
清水ちかき本堂より見わたしては
西山も白雲名をとめこめて舎も見えきし秋の色みえた
秋をまさき清き君のまなきや入れの清き花ハちゝ松を
十九日晴く日うつりてのあつさいたくなきは雲ハこととえいささか
いつ思ひ見えゆきてこのあつさあらたく猶上より東山のとえ見せつ
東山都をつつみて霧をえかくるやうみ西のたまの
まもり十五六日の頃ハ丹波あたりハさらなりいつも水害のをれを
うらしとききて
さうまた来るほとけかしこきいかに流るゝ國のわざはひ

[illegible]

三十日のあさ　船より陸へ移る

東山殿のまへ　ちかきそこのつをうををそ

三十一日　松のもり　聖福寺へゆきて

船頭よくしる国　[illegible]

やそさん　[illegible]

九月一日　[illegible]

[illegible]

二日　[illegible]

東山殿のまへ　[illegible]

三日　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

仙人のよし　[illegible]

[illegible]

南禪寺の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五日　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

露の玉きえ行きを物かやせ都の秋も北嵯峨の月にさそ
とまりて待ちくらしまたしその後いかにおこせる
おもひきや紅葉の秋を尋ねつゝ玉の緒ながら行きてみんとは
この世之羅漢の橋をわたりて
まつ大のうみをまなびてまつ見えて秋やいつまでかへり
六日 かすみて仏のごとく取り出して
鐘こえたがひがいをまさところもあらす和尚八坂大谷
北山をこえわたして
北山はさらにこうすめることはりなくてあさやくもりかな
七日 雨降りふりて
雨雲も北なりけりまた山は月おぼろになみてねむるまで見ゆ
八日 朝雨ふりて止みにきて午後
東山あつまる雲流れゆくあけ方秋のゆふぐれのさびしさ

其日より夜は双林寺のあたりにとまりて
中まさしくうつり月も見えて萩原の花
円山の桜ののちにやどりて
やどり行くこのたびのかへりて東山の桜花かくれ行くやど
それより祇園町をとおりまた
このあたりふるさとへ秋もなくて八坂の塔も見えかくれ
九日 朝雨ふりてまた三条の橋をわたりて
若草野の原羽の里を出で川せみこゆる雨はやまれ
十日 天よりの雨やみ晴て双林寺にゆきて
御なさけの雨にも秋はもののあはれさらにをかしくあはれ
十一日 また円山双林寺のあたりをめぐりて
橋の本あしたころきこえてこれは秋のさきに宮まいれり
比叡の山のやまひらけて

ましての秋もやかゝりけむ萩にさんとやうりけり
ふるきしよりおくもゆかしくて二条三角通寺町の
萩えにゆかれけるにみえうたる近い
とふらひてともめて萩ふる寺や庭の秋萩人まちなん
十二日晴円山園の池にて
池の波玉をちらして玉錦も秋のむしのもなくなり
そのつき長楽寺の嬉しうしあるなりて
光ある寺にあきらかにあきらかにむかしこそむかしの月夜なれ
そこをはなれ勝の方を
くもり入れるをもけずさてられて来もつくしる山寺の勝
見ることしもありしかのくしまれて二つ見るものなりけて
萩さきは帰のやどり山あきさ堂や天下の名所
いつまでも萩をあきしを枝こらく散るまで園はこのそめ

今の音とともをたつるこえうらされてあきるかりふる花あり
萩もれかさいすめのふ露をとかくつれるやうにそえて
昨日の音をのべるともされなりませいそこ殿に花とさ錦ここ
されいせんきへけり
あつ風やのあゆりる耳の鳴れい昨日今日さらにやれそうなん
うかる雲花月とゝもあめ
見せとは見えぬにけるうれしきの月さてこのゝ萩の宿
十五日くもてにまして嵯峨の紅葉の
見のがさとてからここにそありけりいざ川の流さそれをあらしやま
嵐山ちつきにて勢至院の方まで多くいた渡月橋を
わたりて
まつへこの紅葉にかこまれ山寺い嵐をよそにあきなれば
夜雲ありてゆかしへの月なる

[illegible]

十四日 [illegible] 桜木をゆきて

桜木のまつをこのくらいるとこころいつ秋の海をうら

海をあらはやと [illegible] 人のうらこ

二条のこ三門 [illegible] 嵯峨景樹

の春のあさいとうしんぬ

ことのをくかをそ [illegible] ふくや桂の風の桜花

をとよ [illegible] 春のうとをうらもをうつ

[illegible] 春の門 [illegible] 桜花をうつ [illegible]

久しの男山八幡宮のうら [illegible] 高の [illegible] 奉行 [illegible]

[illegible] 光つ [illegible] 年このうをを [illegible]

ことをれかりし [illegible]

をとと山沖のこゆきをみさきをなて今やをそうん峰の桜風

大うの光とうた男山 [illegible] 方山 [illegible] 桜の [illegible] やわらく

このゆふべは、いとおもしろかりけり

天の波たちぬる宵の月の舟かくれなきまで出にけん

いつる山ハあらで都に月をこそ見るとぞ思ひき

ありてつれなくしかれとハ城都ハあはれなりけれバ

亭主も桜の下にありてながむれハ露のこぼれて

みつるより月下の萩をみれバそのかげにあはれなる

ゆくの道ハ都の中までおもしろく見ゆれハ

咲きみだれ花のころこそ此路をハ秋の空に出てゆかる秋風

かの家の萩ハ今さかりなれバ人々かよひ来たりてながめつゝさわ

ぎあへるこそ哀れなれ。待よひハよきおりをえてなかめつ

ながめハ菊ハ月九日にて月やはなやかに照りてさやかなり

天をはらふ雲もなくさやかなる羽衣を見し月のてりそふ秋の

月を見る露の萩原むし鳴きてあはれにならぶ秋のさかりぞ

萩を植しも見しことしやから火てらし秋の花を

みかけ植ゑたるを

月をめづる風のやどりに露かゝる桔梗ありて

かく置く露ハかゝる彼花の咲てむすぶ

月に萩酒をのむハ草と空秋のみちにうつしたる

ならぬ事にてたゞまづあはれならむ月見萩にて

うつせる円山をながめて

円山の梢をもて見月にむかふとこそおもしろけれや

十七日ならびに壁掛なるもので

おきかへるも露の光ハかたしく萩そわくるそのかたみ

なハ古文の山のなれハ孫みれバ、昨の事なる定家おほん

こしきさくる花ハかちらに植うるこの身のおとろへ

これ定家かそのかつころの月ハくもりなく

[illegible]

六日の夕くれまでかすみわたりて[illegible]

ゆきて陶器を買ふ

[illegible]坂のゆきゝに秋の花のおりしきたる

こゝろもとまりて月をこそ

月をいさゝかいとゝ行[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十九日時雨のこゝろ同じゝて

[illegible]

[illegible]

かの[illegible]

あるゝ北山[illegible]

吹[illegible]

[illegible]

金閣寺にて

[illegible]

この[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月もたつ[illegible]

[illegible]

[illegible]

おりて四五町ゆきて

九重のくものうへまで露ちりて袖ぬらせ月やとふらん

丸太橋をわたりて月やうつくしく見ゆ

三条ゆく月のうきさへ竹そうて流れ出せるかもの川なみ

三条西洞院の前なる萩園に夜火あそびして人々をもてなす

萩つゆを照らしおもひて花火より園に人あつまる

十四日くもりていと思ひやる円山なる園はさきつゞき

人々きゝて来ぬさかりきぬらし

秋さむくなりゆくまゝに園はちるや人もちるなる

こよひはくもりてはれとゞこし

ちかきかたんこよひは世のかさねて月はいつのまにかきえ

十一日雨ふりく宿のうらあそびて

仕宿にゆくさん秋のころもとこてふのぼりの弥

雨中の秋をうたひておもしろき陰ゆく

その秋らはあやしき雨ゆゑにまたさそへる人もなかりせは

なかりてうらむなめこふる雨をそへて秋といつもあはれなる

今は高く月十四日さてかは月は雨にかくれたり

あはれいあきと見えこよひは月をまつ人をくゝ雨ふるならむ

十二日くもりてこよひこそ十五夜なれど待ちまつ

なきなるなと小雨さへふりくゝたねかなた

家のあるしはかくをとよりていとゝ鳴きそえんなれ

おのさえより門出せんこの命うしとおもひきつくほとまゝ

なかをとれるさむきせんされとかなうこの様きてかくは

されとぞうちかりておもしろくよろこびてまちくらま

あきなきかゝる絹宿のなかりつこゝろゆさと

雨ふりても月まちはるこゝろせずこそは新なるちかきなにかぬれて

このゑの月ハ桜よりうちにむかへる山より出るにあたりつゝ
ゆきて都のなかにまじりて見えしかば宮居ハ
あかりやうちうちすりぬるやそらちらもまて都をあれとあかれ
御しき北面のつねさうらひつゝ月のかげあるにつきて
なかなかあはれ深し都をて月の光にかゝりあはれ
うるさまでこともいはず月さえ風につてさやさやかちて
からにも酒すゝめられ猿を酔はせて人ゆることかなはず
人きよき月の歌のたのしきをうつしとのみるそれそ
月にてみちゆきまはりさいへて見えつぬきハ洞をたらせ
あさましてききつれに
ちるの月をたちのそく清き池にもろもろあふきて
あまてはられはさちるそむきあへのひらつゝ門のくる
白川のさきしるをたどりて

白川の右の流にあこうきて月のかゝる　かくまでゆく
なかくてその川ぐちより　跡見院の門へまでたちゆきて
大学北門あたりへたち給ふ月をこそとおぼしくて
まさのしのゆ川合なる橋のさかなをまつたに
見わたせる橋の上もめづらしく月すめる様は吉田山
東に入るまでほのぼのあかりつらむ入りぬるに月をえて
このみをみんと紫めて日比へ人のまさる深き松の寺
ゆくゆくと思へはあれの松まとふんを跡して今ぬ
ことさらハ多語をでせハさや夕つ見まて千里の外にさきて
十三日より晴かよおつる庭より下かも殿まじりて二條より
電車にのりて出町に至る萬橋をまゆる
なゝめくさき秋にあたる橋まはいわゆる流のちるを
紀の杜かちこる事ありいまはるゝ糺ノ森の林を

蛙ハ程秋をまちんあらそひと時をたゝぬ杜の下風
かへるの声おちかゝしくめそく
ゑちの肋影芝の神さびてたふときろかゑのこゑ
かゑ堤つゝむ柳陰をさぐる道をうちむつく
かゑかをるうちぬ塘をたつ程て吉野昔の古柳の糸
こゝの路にさくらの花りまやく淀ハ流をゆくふさことく春をはいは
こよひの月ころあいともさるを行なされ十六夜ゆゑいそく
まいおよしとシつまより おのしよりもてゆくまゝ立出つさそ
知恩院の裏門をとおりて円山まゐるその道の秋をみつゝ
ゆる時程をすぐ一ヶ所へ入て酒のみ露筵をもふく人多く
して見せけるれとくそこをさへ円山のあたりこそさきとえ
ほとるもそれと月いおもしくして山を出やらん
出るさいたゝぬ月を待かねて山をこゝとむさうき世例の

やそ山の空白いころにて出され
まる山と名月しかりいさし出る月影まるこえれハ
ふさく高くされて月はうらも緑よりまつかとそ知る
あをしらちまうしゝ形をうつてみそや吉田の原のかゝりゆき
なるを月まゝ山ばかりきまぬ流あうして
かつまてかつちかつそて嵯峨の山より月のいつるを見る
うるむへき風たゝにして月まつ吉野の原に露をかすれた
このあたりは大路をとおりて名所の画工のまゝしく流あかるを出か
ころもこれゑちころを
かさまそし一筆ころをあまりたり月むかうとうつれのこそ
まる月見桜をいつる旅の衣をさきさて
中々月見のやさい人をすきたいみゝ程てうつを以てそん
こさまれ人あまる好み中に月見のむれ行末の名残しきてかさる

清き流れしづかにおほしよる人のそでにうつしてながめつゝまた
のそでやこととよまれけるかな
　つらきよわる人をやとはずもて月をもちける人もありけり
さてかの円山なる池のおもてにさされハ月のかげの出井にあり
池はさながら鏡とうつしやまかるゝゆゑにゆかしき月のかゝりつゝ
あまりきよきは浪なぎまさりて月いよいよさやかなり
　月見ると出しそのきハなをむしとれて夜をまちつ
朱 曙ぐすりの後は秋雲晴登て夜のあけしもいとあかきハ
おもしろき空 東山のうすきをかくさんと先吉田をさして出つれこなた
むこのみえしき友あきハそのかりとひて志賀しかくしもやそこ吉田神社
にまうつ
　よし田山よしや世谷かさなるほかやむかうみねをましまさん
いかなるハ学校をさしたてつれてさきつ寺見さらしなハいたく

いかならぬかへそ神楽の岡なる宗忠大明神の前に出たり萩をさか
　小さき袖にみだるゝばかりかくの露にさそはるあさまだき
ここも色のかげにむかひて見わたしもまたくれて月をみんまたたくさ
なきものぞ
　月をまちつゝこゝろそはし猶ふることのめでたき山をあふぎて
といふ名をかうぶりしも猶ハ真如堂をこえて銀閣寺のほとり
ゆかんとするに北山くらくして雨ふりつればそれかしこハえゆかずして
　かくてそのまゝやと雨やそそくらん月待山ハくもるなりことと
かくて銀閣へて帰るまゝに雨はふりそそぎておもしろきわたり
つゝいとゞちつしに法然院にいたりて浄土のみちをたどりて
このあたりハ雨きよらかなれば外の様見えなくして世をわするゝさま
かゝる所に
　帰るさの風もさそひてこの庵は露をあつめておくらくらし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大石川秋ちつかれあつまりて[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

却てそのかたちやうを知らぬ
ことをうれしがるこゝろ
却かうしんといふものゝ
ありさまをかくこそ

寛政四年十月の末つかた

さとの